

第一回 地域交流セミナー

テーマ「論語を読み直す」

【講演の要旨】

中国の古典として、『論語』はアジアの人々に親しまれてきた。しかし、『論語』の解釈や、孔子という人物に対する見方を改める必要があると考えている。

孔子は貴族ではなく、低い階層の出身であった。両親を幼い頃に亡くし、正式な就職ができずにアルバイトの日々が続いた。孔子といえば聖人君子というイメージが強いが、貧困の状況下で勉学に励んでもなお、「まだ君子にもなれない」と孔子は嘆いている。

『論語』のなかに「郷党編」があるが、そこには季節はずれのものや切り口が雑なものは食べない、食事中には話さないといった生活のこだわりが記されている。孔子は非常に感性が鋭い人だということがわかる。また、『論語』には決して道徳的なことばかり書かれているわけではないのだ。

孔子は「仁」に重きを置いた。「子曰く、^{まこと}苟に仁に志せば、悪しきこと無し」（里仁編）、「子曰く、巧言令色、^{すく}鮮なし仁」（学而編）と、『論語』には数多く「仁」の言葉が出てくる。弟子一人ひとりに異なる説明をし、最愛の弟子である顔淵には「仁」とは克己復礼だと説いた。「仁」は人偏に数字の二と書くが、意味を解釈するならば、人と人とのあいだに現れる「いのち」と言える。

「子曰く、君子は和して同ぜず、小人は同じて和せず」（子路編）、「子曰く、君子は義に^{さと}喩り、小人は利に喩る」（里仁編）、「子曰く、君子は器ならず」（為政編）。孔子は「君子」とその反対の「小人」についても何度も言及し論じている。君子はアニミズム的教養とともに、共同体主義、文化主義的などの特徴をもつが、小人はシャーマニズム的で、利益尊重、覇権主義的といった特徴をもつと言うのだ。また君子は朴訥であるが、小人は饒舌^{じょうぜつ}で、上から目線で説教をするために共同体を破壊するとも主張している。

『論語』が誤読されてきた背景には、その世界観がアニミズム的であるのに、汎神論的に読んでしまってきたことがある。しかし、日本人は、その本来の世界観を理解できる。同じ場面を経験した一人ひとりが、わずか17文字でそれぞれ異なる表現をする俳句のように、「仁」すなわち人と人とのあいだの「いのち」を感じるができるのだ。